「受容への過程・仮説模式図－試作－」

阿部幸泰

先日、ある心身障害児通園施設の職員研修で「保護者と係わりについて」のテーマで講話の機会を得た。このようなテーマであれば、かの有名な Drotar.（1975）の「先天奇形をもち子どもの誕生に対する正常な親の反応を継起を示す仮説的な図」を参考資料として話すことが多い。

しかし、障害児をもつ多様な親のケースを見聞してきた私の長年の体験から（今も見聞しているしているが)、親の心情は常に（図的には、上下にも、左右にも螺旋的に）揺れ動いているのが実状でないかと思い、私の想いが図式化できないかと常々思っていた。そこで、この講話の機会にと思い作図にチャレンジしてみた。「障害児をもつ親の受容への（螺旋状）過程・仮説模式図－試作－（参照：「試作図」)」です。

横軸は Drotar.D.の「仮説的な図」の区分を採用した。さて、縦軸をどうするかで悩んだ。

一方、私は、在宅緩和ケアを少しお手伝いしていることから、ホスピス医等の著書を目にする機会があった。その読書の作業から、がんの当人の受容の問題と、親の我が子の障害の受容の問題と、当事者の心情である「受容」という観点からは同じ問題でないかと思うこともあり、縦軸を受容の高低としてみた。

差し当たりの講話は、Drotar.D.の「仮説的な図 」とこの模式図を併用して話した。

いつもの私の厚かましさから、試作図を幾人かのメル友に見てもらったところ、ある大学の障害児教育関係の先生から、「親の障害受容に関しては現在 3 つくらいの仮説が出されていると断った上で、論を展開されてはいかがでしょうか？」とコメントをいただいた。単に講話の資料までにと急いで試作しただけなので、論を展開する程に、まだそう多くは文献をあさっていない。長年の体験から、色んな事例を対照するだけであれば、論を展開できそうな気もしないでもないが……。

そこで論を進める前に、すでに Drotar.D.の「仮説的な図 」を見たことがあり、親のこうした受容に関心のある方にこの模式図－試作－をみていただき、まずはコメントをいただければと思い、試作の段階ですがあえてＨＰに記載しました。

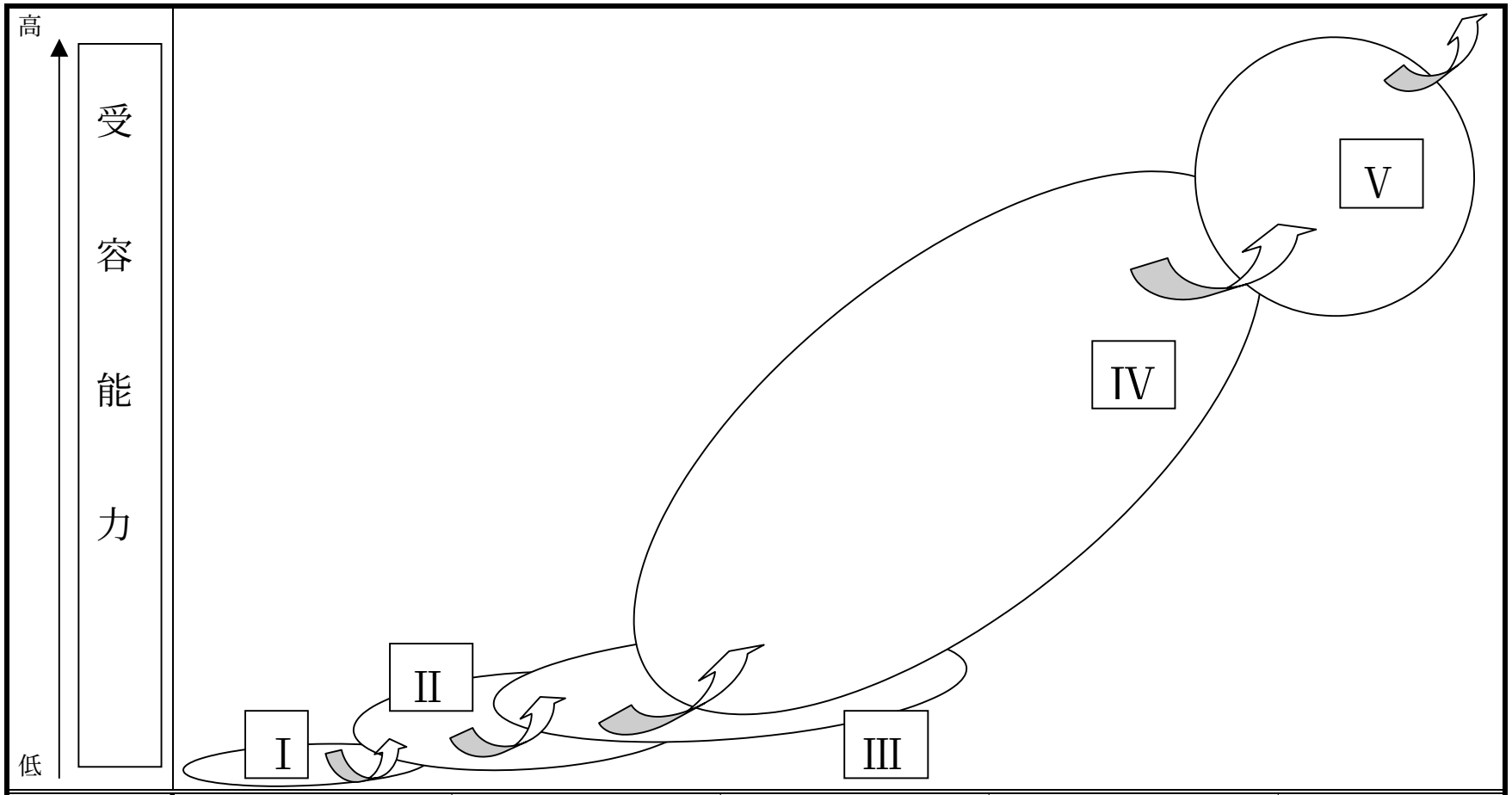
見ての感想をいただければ幸いです。

（2004 年 06 月 16 日　記）

障害児をもつ親の受容能力への心情の（仮説）層過程模式図

（　阿部　2004．6．）

受容能力 :自分に不都合なことが起きた時に、その不都合さの中でも人間として生きているという証を見ることができる能力。）



Drotar (1975)の区分	I　ショックの時期	II　否認の時期	III　悲しみと怒りの時期	IV　適応の時期	V　再起の時期